

神なき国の子どもの誕生

——高度経済成長期における「幼児期と社会」——

The discovery of Children in a Godless Nation
-Childhood and Society in the age of Japan-Miracle-

小谷 敏*

SATOSHI KOTANI

<キーワード>

アリエス(Ariés), 大正自由教育, 高度経済成長期, 専業子ども, 教育ママ, 「小さな大人」

<要 約>

アリエスはヨーロッパの17世紀を「子どもの誕生」の時代と名指しした。そして、子どもの固有の価値の発見と、キリスト教的習俗との深いかかわりを指摘したのである。しかし17世紀の子どもの誕生は、あくまでも萌芽的なものに過ぎない。19世紀以降の工業化の進展に伴って、子ども期は様々な社会のなかに浸透していったのである。子どもたちは保護と教育の期間としての子ども期を享受するようになった。そしてヨーロッパ社会のなかで無垢なる子どもは、工業化に対する対抗原理としての価値を持つに至った。

日本でも明治維新に際して西欧的な公教育の制度が導入された。日本の公教育は、子どもを富国強兵のための手段としてしかとらえてはいなかった。子どもの固有の価値の発見は、大正時代の芸術教育運動のたかまりをまたなければならない。大正時代の「子どもの誕生」の担い手となったのは、新興の都市中間階級であった。

高度経済成長期はわが国における第二の子どもの誕生の時期となった。社会が全体的に豊かになり、「家業」から「職業」への以降を果たしたこの時代に、家業や家事の手伝いを奪われた、ただ大人に依存する存在としての子どもである「専業子ども」が生まれたのである。この「子どもの誕生」は、西欧のそのような宗教的な背景を欠くものであった。そして工業化への対抗原理としての子どもというヴィジョンも、この国に根をはることはなかった。そのため資本が子どもたちを市場化することへの抵抗力が生じることはなかった。この時代の子どもたちは潤沢な小遣いを与えられ、お菓子やマンガ本を買い漁るなど、すでに消費者として自立していた。またテレビの前に座る彼らは、情報という点でも大人と同じ

地平に立っていたのである。そして受験競争という形で彼らは、幼くして社会の競争原理のなかに投げ込まれていた。「専業子ども」は、「純粋な子ども」であると同時に、「小さな大人」という両義性をもつものであった。

1. 「子どもの誕生」再考

(1) フィリップ・アリエス『子どもの誕生』

「中世に子どもはいなかった」。このテーゼによって知られるアリエスの『子どもの誕生』は、彼の母国フランスより、まずアメリカで大きな評判を勝ち得ている。その時アメリカでは、この本は、バナナ商人が書いた子ども論であるという奇妙な噂がたった。熱帯農業の調査関係の仕事に従事していた彼の履歴が、こうした噂を呼ぶものになったのであろう。彼は最晩年に至るまで、大学教授のポストに就くことはなかった。自伝の表題が示すとおり、「日曜歴史家」(Ariés 1980=訳1985)こそが彼のアイデンティティだったのである。

アリエスは、当時のアカデミズムの世界で支配的だった政治史ではなく、無名の人々の日常生活に注目し、その習俗の変化の記述と分析に力を注いでいた。そしてアリエスは、やはり当時の歴史学のなかで力をもっていたマルクス主義的な経済決定論とも一線を画していた。人間の心性とそれを規定する社会の習俗は、経済状況に還元しえないとアリエスは考えていたのである。

子どもは自明の存在などではなく、近代のまなざしが見出したものだ。それ以前の時代に存在したのは「小さな大人」である。自分の身の回りの世話ができるようになると、当時の人々は大人と同じ衣服を身にまとい、大人に立ち交じって働き、遊んでいたのである。中世に「子ども期」と呼べるものは存在しなかったし、子どもたちは大人の特別な情緒をかきたてる存在でもなかった¹⁾。乳幼児死亡率の途方もない高さのゆえに親たちは、たとえわが子を失った時にさえ、悲嘆にくれたりしなかったのである(Ariés 1960 訳39頁)。子どもや若者に対する教育も、実地に彼らを放り込む「見習い修行」が主流をなしていた。

転機は17世紀に訪れる。この時代に「激高」と「かわいがり」という、子どもに対する二つの相反する態度が生まれた。子どもたちの容姿や行動のあどけなさ、かわいらしさを大人たちは愛でた。他方で大人たちは、子どもの粗野で無秩序なふるまいに憤激したのである。この時代に大人とは区別されたものとしての子どもが、人々のまなざしのなかに浮上していった。そして、子どもたちを大人の世界から隔離して、保護と教育の対象とする心性が浮上したのもこのころのことである。子どもの無垢は、社会の汚れから遠ざけられて、守り育てられなければならない。他方、粗野で無秩序な性向は、規律と訓練によって修正されなければならないと人々は考えるようになっていた(Ariés 1960 訳126頁)。教育の主流も、「見習い修行」から、スクーリングに移行していく。

アリエスは、17世紀における「子どもの誕生」を、ヨーロッパ社会においてキリスト教習俗が一般庶民のなかにも浸透していったことと結びつけて論じている。キリスト教的習俗の浸透が家族と子どもの価値を、高めていったのである。家族は、主イエスが生を受けた聖家族のレプリカントであると考えられるようになった。婚姻を聖なるものと教会が認証する結婚式の風習もこの時代に始まっている。夫婦が特別な存在となれば、その間に生まれる子どもたちもまた、特別な愛着の対象となる。イエスは子どもの形をして生まれてきた。このことから子どもは無垢なる存在であるという観念が生まれていったのである(Ariés 1960 訳338-341頁)。

中世を特徴づけたものは、人々の混交である。当時の人々は、身分の貴賤や経済上の貧富さらには老若や性別の隔てすらなく、街路や貴族の居住する「大きな家」を舞台としながら、旺盛な社交生活を繰り広げていたのである。しかし近代の到来とともに、混交の時代は終わる。諸身分や階級

の間には垣根が生まれた。人々は、街路の社交から撤退して、閉ざされた家族の枠に引きこもっていったのである。子どもたちもまた、大人の世界から切り離されて、家族と学校のなかにいわば幽閉されていった。大人たちにたち交って活動する自由な主体ではなく、監視と教育を受ける客体の地位に貶められてしまったのである。

近代を閉じ込めと監視と訓練の時代としてとらえ、その抑圧的な性格を告発する。この点においてアリエスとイリッチ、フーコーは一致している。そしてアリエスは過去を賛美し、過去を準拠枠としながら現代の産業社会を批判している。彼がとりわけ賛美したのが、アンシャンレジュールのフランスであった。アリエスはこの時代にみられた旺盛な社交生活への郷愁を隠そうとはしない。18世紀以降、勝利を収めたのは個人ではなく、むしろ家族であった。閉じた近代家族は、子どもを育て上げるための一つのプロジェクトに墮してしまっただけである。両親の人生は、このプロジェクトに完全に従属してしまっている。「夫婦のエネルギーの全体が、自発的に少なくしか作らない子孫の出世に向けられるこの近代的生活のなかにあって、いったいどこに個人主義がみえるのだろうか。個人主義はむしろ、アンシャンレジュール期の多産な家系の快活な無関心の側にあるといえはしないだろうか」(Ariès 1960 訳 381頁)。カトリックという宗教的基盤。テクノロジーと官僚制の支配を嫌悪するアナーキーな性向。そして過去を賛美し、それを産業社会を批判する際の準拠枠としていること。これらの諸点において、アリエスとイリッチは酷似している。

(2) 工業化と子ども期の浸透—アリエスへの疑問

しかし過去を準拠枠としながら現代を批判するという態度にはいささか問題がありはしないだろうか。「王党派」をもって任じるアリエスが、アンシャンレジュールを舞台とした人々の旺盛な社交生活へのノスタルジアを熱く語ったところで、われわれはそうした時代に戻れるわけではないのである。「社交」の舞台の主役たりえた貴族やブ

ルジョアにとってアンシャンレジュールはよき時代であったのかもしれない。しかしこの当時の名もない庶民の暮らし向きは、われわれが羨むようなものではなかったはずである。民衆の心性と習俗の変遷を跡付けたとされるアリエスだが、実は貴族とブルジョアの視点から歴史を語る傾向があったことは否めない。

近代的な家族感情と子ども期の誕生を17世紀に認めたアリエスの説を、E・ショーターは、「おそらく彼の説は正しい」とした上で、一般庶民は「…少なくとも18世紀の末まで、幼児に対する昔ながらの考え方を変えなかったし、階級や地域によってはもっとのちまでそれは変わらなかったはずである」(Shorter, 1975 訳 381頁)と述べている。エンゲルスがイギリスの少年労働者の置かれた過酷な生活実態を告発したのは、19世紀のことであった。17世紀における近代的家族感情と子ども期の誕生とは、萌芽的なものにとどまっていたのである。暖かい両親の愛情に育まれ、社会の荒波から保護されて育つことができたのは、貴族とブルジョアの子どもたちだけだったのである。

先にもみたようにアリエスは、アカデミックな歴史学において支配的だった政治史とマルクス主義的な経済決定論とに強い対抗意識を抱いていた。彼は心性をいわば独立変数として語ろうとしたのである。たしかに政治体制のあり方や経済状況によって、習俗と心性のすべてが決定されてしまうわけではない。しかし、国家体制や経済状況の変遷を抜きにしてそれらについて語ることにやはり無理がある。近代国家による公教育の導入と、工業化の圧力抜きには、子ども期が広く社会に浸透していくことなどありえなかっただろう。

初等中等教育はフランス革命に起源をもっている。公教育が担う初等中等教育は、フランス革命の理想と深い関わりをもつものであった。貧富の差に関わりなく、平等に教育を施し、共和国を生み出すことを目的として、近代的な公教育は出発したのである。公教育は、19世紀における国民国家の発展とともにヨーロッパ世界に普及していった。すべての子どもに読み書き能力を身に就けさせ、一定の規律に従って行動しうる「従順な身

体」をもった主体を生み出すことは、強い軍力と工業力とを必要としていた当時の国家にとって重要な意味をもっていたのである。そして学校は、母国語の学習を通して、国民意識を子どもたちのなかに植え付ける上でも大きな役割を果たしていた。公教育はいわば「上から」子ども期を社会のなかに浸透されていったのである。子どもたちは義務として学校に通う数年間は、大人の世界からは隔離されて育つのだから。

工業化が近代的家族感情の形成に及ぼした積極的な役割を指摘したのは、さきの E. ショーターであった。伝統的な農民の社会のなかで人々は、共同体的な規制のなかに埋没していた。結婚も家産の維持と継承を目的とした打算的なものでしかなかったのである。工業化は同時に都市化をもたらす。都市の生活は、共同体的な規制から免れているし、家産の維持継承をめぐる打算も働かない。そのために婚姻も男女両性の愛着に基づくものとなった。こうしてまず貴族とブルジョアの間に生まれた家族成員相互の友愛に基づく近代的家族感情は、都市の労働者階級の間にも浸透していったとショーターはいう (Shoter 1975)。

工業化の進展が子どもの価値を高め、子どもを理想化する風潮を生み出していったことを指摘するのは、P・カヴァーニである。イギリス労働者階級の子どもたちが置かれた過酷な状況に対して怒りをあらわにしたのは、エンゲルスのような社会主義者たちばかりではなかった。子どもの無垢と過酷な社会環境とのコントラストを強調することは1930年代以降のイギリス文学の流れとなっていて、それを代表する作家としてカヴァーニは、C. ディッケンズの名前をあげている (Coveney 1967 訳 89頁)。無機的な工業社会を呪詛し、無垢なる子どもたちの生命力を称揚することは19世紀のロマン主義者たちの愛好した主題でもあった。ロマン主義者たちによって発見された工業化の対抗価値としての子どもの無垢という観念は、アリエスの強調したキリスト教の伝統に深く根ざすものである。

2. 神なき国の子どもの誕生—高度経済成長期に起こったこと

(1) 子ども観の近代—日本社会のばあい

日本でも欧米にならい、明治5年に学制の公布が行われている。その当初、新しく生まれた学制は人々の大きな反発を招いていた。当時の子どもは「小さな大人」。農民にしてみれば、重要な働き手を数年間学校に奪われるのである。日本の農村には村人の合議による自治の伝統があった。「若者宿」や「娘宿」などの年齢階梯的組織が、若い世代を教育する機能を担ってきたのである。学制は、こうした村の自治に対する攻撃と受けとめられた可能性が高い。ほぼ100%の子どもが6歳で小学校に入学するようになるのには、明治40年代をまたなければならなかった。

学制公布のなかには、「村に不学の戸なく、家に不学の人なからしめんことを欲す」という有名な文言がある。しかし学校ができる以前の日本の庶民のなかで文盲が圧倒的な多数を占めていたわけではない。江戸期の日本が識字率の高い社会であったことは知られている。江戸期の日本においては都市と商品経済が高度に発達していた。「読み書きそろばん」ができれば、都市での仕事に就くことができた。このことが読み書きを覚えるためのインセンティブとなっていた。武士の子弟が通う藩校だけではなく、寺小屋や塾における庶民の子どもの教育も活発に行われていたのである。子どもたちにリテラシーを身に付けさせるためだけなら、あるいは公教育のシステムはこの国には必要なかったのかもしれない。

それでは学校は何のために生まれたのだろうか。西欧列強に伍していくことが、新しい日本の国家目標となっていた。「富国強兵」のスローガンのもと、「国民(天皇の臣民)」としての意識を植え付け、子どもたちを工場労働者や兵士等の近代国家が必要とする人材に育て上げていく機能が学校には担わされていたのである。学制の公布がいう「不学」とは、読み書きができないというよりはむしろ、国家による教化を受けていないという意味に理解するべきであろう。「教化」の内容には、

読み書きだけではなく、西欧的な身体動作、公衆衛生の観念や時間厳守の習慣化、そして後の教育勅語が象徴する国家への忠誠等々の事柄についての「規律と訓練」が含まれていたのである。

アリエスは、近代の学校の祖型となったカトリックのコレージュ（学院）の創始者たちが、子どもの無垢を守り育てることに大きな責任感をもっていたことを明らかにしていた（Ariés 1960 訳 128頁）。しかし学校制度を創った明治の指導者たちのなかには、子どもに固有の価値への関心などはかけらもなかった。彼らは子どもたちを富国強兵政策実現のための、単なる人的資源としてのみとらえていた。このことが後の日本の学校の性格に大きな影響を及ぼしていく。

大正時代に入ると、民間の芸術家や教育者たちのなかから子どもたちに対する新しいまなざしが生まれてくる。鈴木三重吉は、雑誌「赤い鳥」の創刊の辞のなかで、当時出回っていた子ども向け読み物の低劣さを厳しく論難し、それらが子どもの純粋性を損ねている現状を憂いている。大人の文学のまがいものではない、子どもたちのための文学（児童文学）という新しいジャンルの創設を意図して鈴木らは、「赤い鳥」を立ち上げたのである。この時代にはまた、多くの「童謡」が生まれている。子どもたちの無垢なる「童心」が賛美された時代でもあった。子どもを大人とは異なる独自の存在とみなし、その純粋性を守り育てるために、子どものための独立した芸術のジャンルを創設を志向した大正期の芸術教育運動のなかに、日本における「子どもの誕生」を認める論者もいる（河原 1998）。

20世紀に入ると世界的に新教育運動と呼ばれるものが勃興していった。哲学者ジョン・デューイの実験学校が代表するように、既存の知識の体系を子どもたちに押し付けるのではなく、子どもたちの内発的な関心を重視し、彼らの日常生活と有機的に結びついた教育を志向したことが、この運動の特徴である。日本でもこの潮流に共鳴する教育者たちが多数あらわれた。沢柳政太郎の成城学園を嚆矢として、リベラルな教育理念に立脚した私立学校が相次いで創立されている。これらの学

校は一樣に、知育に偏することなく勤労や芸術的な活動を重視して、子どもたちの全人格的な成長をその教育理念に掲げていたのである。こうした潮流は、「大正自由教育」の名で呼ばれている。子どもを人的資源としてみるのではなく、一個人格として認め、その尊厳を守り育てようという教育者たちが活躍したのが、大正という時代であった²⁾。

日露戦争の勝利によって、日本は強国としての地位を揺ぎないものとしていった。大正期には経済も順調な発展を続けていたのである。この時代の豊かさは、高い所得と教養とに恵まれた都市中間層を生み出していた。ヨーロッパで400万人もの死者を出した第一次世界大戦の惨害も日本とは無縁だった。豊かで平和な時代は自由な言論を喚起していく。それらは当時急速に発達していたマスメディアによって広く社会に伝播され、「大正デモクラシー」のうねりを生んでいったのである。一連の自由教育運動は、大正デモクラシーに背中を押されて発展していった。そしてこの時代に成立した都市中間層が、「赤い鳥」が代表する児童文学や、自由教育運動を支える社会的基盤をなしていたのである。しかしこの時代の日本社会においては、まだ大きな貧富の隔たりがあった。子ども期の恩恵に浴することのできた者は、一部の階層の子弟にとどまっていたのである。豊かさが日本社会の全体にいきわたり、アリエス的な意味での「子ども期」をすべての子どもが享受しうようになるには、戦後の高度経済成長期をまたなければならなかった。

（2）高度経済成長期と「専業主婦」の誕生

教育社会学者の山田浩之は、高度経済成長期を「赤い鳥」を生んだ大正時代に次ぐ、第二の「子どもの誕生」の時期であるとしている。たしかに高度経済成長期は、子どもの「他者性」が人々のまなざしに浮上した時代でもあった。「現代っ子」と「肥満児」。そして子どもたちの世界を歪めるものとしての「教育ママ」…。子どもを取り囲む世界と子どもたち自身の変貌とが、人々に強く意識されるようになったのもこの時代のことで

ある。

高度経済成長期には、工業化が目覚しく進み、人口の都市への集中が顕著なものになっていた。就労人口の多くが農家や個人商店や町工場のような「家業」を営む人たちによって占められていた時代から、官公庁や企業に雇用される者が多数を占める「職業」の時代へと移行していたのである。農村や街のなかで男性に立ち交り、真っ黒になって働いていた女性たちも、専業主婦として家庭に納まるようになっていた。女性の労働力率は、高度経済成長期を通して低下している。男は会社（サラリーマン）。女は家庭（妻・母＝専業主婦）。そうした性別役割分業に基づく生き方のモデルが生まれたのもこの時代のことである。

こうした社会の変化は、子どもの世界にも大きな影響を及ぼしていく。無茶成恭の名著、『山びこ学校』が明らかにしているように、昭和20年代前半の日本の山村では、学校に行くことさえままならない子どもたちが稀ではなかった（無着1995）。これほどの貧しさのなかにはなくとも、「家業」の時代の子どもたちは、家庭や地域のなかで役割を担い、大人にたち交じって働く「小さな大人」としての相貌をとどめていたのである。しかし「職業」の時代の到来とともに、子どもたちは地域や家庭での役割を奪われてしまう。手伝うべき家業は、もはや存在しない。家事は専業主婦のお母さんの仕事になった。この時代の日本では、「専業子ども」が誕生していたのである。

大正時代には、大人の世界から隔絶されて成長していく、アリエス的な意味での子ども期を享受しえたのは、都市中間層を中心とする恵まれた階層の子どもたちに限られていた。豊かさがこの国のなかに遍くいきわたっていった高度経済成長期に、子ども期は大衆化していった。1950年代中葉に生まれた筆者らの世代は、「専業子ども第一世代」ということができる。

そしてこの時代には子どもの価値が高まっていった。高度経済成長の過程で、地方から大都市圏に流入していった人々は、近郊の住宅地に核家族を形成していく。新しい核家族はイエ制度のもとでの家族とは異なり、家産と家名の継承という

集合的な目標をもたなかった。集合的な目標を欠いていた核家族は、子どもを育て上げるプロジェクトと化していったのである。ロマンチックな陶酔の果てに結ばれた若い二人が、「愛の結晶」として生まれた新しい生命を育て上げるために全力を尽くす。「世界は二人のために」と「こんにちは赤ちゃん」という高度経済成長期の二つの大ヒットソングは、この時代の家族の理想が何であつたのかを端的に物語っている。家族の幸福は、公的なものとは切り離された、徹底的にプライベートなものとしてイメージされていたのである。

アリエスは、17世紀のヨーロッパ社会における「子どもの誕生」がキリスト教的習俗の一般化に伴うものであると述べていた。無味乾燥な工業化への対抗原理として、子どもの価値を称揚したロマン主義者たちが強調したのも、「無垢」というやはりキリスト教的な観念だったのである。他方日本の高度経済成長期における「子どもの誕生」には、そうした宗教的・精神的な性格は一切存在しなかった。日本には、欧米や他の東アジア諸国のように、キリスト教や仏教のような世界宗教が根づいてはいなかった。そして日本人の信仰心の根幹をなしていた祖霊信仰や自然崇拜も、工業化と都市化の過程で大きな痛手を受けていたのである。高度経済成長期における「子どもの誕生」は、この意味で、「神なき国の子どもの誕生」であつたといえる。

高度経済成長期に、子どもは価値ある存在となっていた。この時代に叢生した核家族は、子どもを育て上げるために存在していたといっても過言ではない。しかしこの時代の日本の大人たちの子どもに向き合う態度には、まじめさが欠けていたようにもみえる。高度経済成長期の親たちは、子どもたちに潤沢な小遣いを与え、好き勝手にマンガやお菓子を買わせていた。その結果、お菓子やマンガのような子ども向け産業が、急成長を上げていった。そしてこの時代に子どもたちも、消費者としての自立をとげていったのである。日本の親たちは、子どもの無垢を守り育てることに強い責任感をもってはいなかった。このことが子どもたちの市場化を安易に許す結果をもたらしたの

ではないか。高度経済成長期の子どもたちは、ロマン主義者が夢想したような、工業化の時代への対抗原理などではなかった。子どもたちはむしろ、工業化の時代がもたらす豊かな消費社会のシンボルとして、その価値が称揚されていったのである。

（３）「工業化の対抗原理としての子ども」の不在

もちろん、子どもとまじめに向き合う大人たちもいた。京都帝国大学の医学部を出て、公衆衛生の仕事に従事していた松田道雄は、第二次大戦後には、京都市内で開業医を営む傍ら、執筆活動を続けている。そして、長年の町医者としての経験のもとに、社会の変化に悩む母親たちにより添う姿勢で書かれた『育児の百科』（松田 1967）は、いまも版を重ねるロングセラーとなっている。同書を刊行して以降の松田は、著述業に専念。同書の改定作業を続けながら、母親たちからの質問の手紙に丁寧な返信を書く日々を送った。

東京工業大学の教授だった遠山啓は、自分の子どもが極度の数学嫌いだったことから、数学教育の領域に関心を抱くようになった。1952年には、「数学教育協議会」（数教協）を結成。「数教協」の活動の成果として有名なものに、「水道方式」がある。従来の「数え主義」を批判して、「量から数へ」という立場をとり、タイルを道具として用いたこと。そして、子どもに苦痛を強いる機械的な計算練習の量を極力減らしたことが、「水道方式」の特徴として知られている（遠山 1976）。遠山は、大学の研究者や現場の教師たちだけではなく、教育に関心を抱く母親たちにも語りかけることにも熱心であった。75年には太郎次郎社から、教育雑誌「ひと」を創刊。テストの点数によって子どもを序列化する現行の教育体制を批判する鋭い論陣を、79年の死の直前まで張り続けたのである（遠山 1977）。

松田と遠山の仕事には共通する部分大きい。両者はともに医療者や教師の側にのみ立つのではなく、育児や教育に悩む親と、そして何よりも子どもの立場から育児や教育に問題を提起していく姿勢を貫いていた。松田も遠山も母親たちに熱心

に語りかけていた。メディアを通して、育児と小児医療、さらには教育の問題に悩む母親たちに、知恵を授け、勇気づけていく。二人の仕事は、医学と教育についてのリテラシーを一般の人々に授け、問題に直面して悩み苦しんでいる人たちに勇気づけるエンパワーメントの活動であったと評することができる。「リテラシー」と「エンパワーメント」は今日の様々な市民的活動におけるキーワードとなりつつある。その意味での二人の仕事の先駆性は、高く評価することができる。

松田も遠山も、鶴見俊輔や丸山真男のような戦後民主主義のオピニオン・リーダーであった人たちと、同世代に属している。戦後民主主義と呼ばれる潮流のなかに、極端に主知主義的な傾向があったことは否定できない。知的努力を積み重ねることで、日本人が市民的主体へと上昇していく。そうした認識を戦後民主主義のリーダーたちが抱いていたことは否めないのである。戦後民主主義のオピニオン・リーダーのなかにも大塚久雄のようなキリスト者はいた。しかし信仰の問題は、個人の内面的な、いってみれば知的な問題として語られていたのである。民主主義的な習俗を支える普通の人々の信仰心の重要性という問題は、戦後民主主義のオピニオン・リーダーたちによって主題化されたことはなかった。

戦後の日本社会を覆っていたのは、科学信仰である。敗戦の原因を日本人の「科学する心」の欠如のなかに求めることが一般的であった。日本は、アメリカの圧倒的な物量を背景とした科学技術の前に敗れ去った。日本が勝てるはずもないアメリカとの戦いに向かった原因も、「科学する心」の欠如に求められたのである。昭和天皇までもが、そうした認識を疎開先の皇太子（現天皇）への私信で語っている。戦後の日本社会のなかでは、戦前のファナティシズムへの反省から、理性や科学が万能視されていた。ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士は、戦後の文化英雄であった。そして理性や科学がほとんど宗教の代替物としての機能を果たすようになっていた面のあることは否定できない。「科学的社会主義」を標榜するマルクス主義が、戦後長きにわたって知的な若者たち

の「信仰」の対象となり続けていたことはその一例である。

松田は医師であり、またマルクス主義や社会主義の国々に深い共鳴を示す人であった。遠山も数学の厳密さに美を感じて、科学の道に進んだ人である。両者のアイデンティティは「科学者」であり、彼らが共通に追及していたものは、「合理的」な育児・医療や教育方法であった。そのことじたいは、彼らの業績をなんら貶めるものではない。しかし彼らの優れた仕事も、科学主義という戦後の大きな潮流のなかに含まれるものであった。いうまでもなく科学主義は、工業化と相性のよいものである。その意味で松田と遠山のなかには、工業化の対抗原理としての子どもは存在しなかったのである。健康で高い学力をもった子どもは、工業化の時代に適合的な人材となるであろう。「育児の百科」で育てられ、水道方式で数学を学んで、「よい学校」→「よい会社」の階梯を上っていった子どもも少なくはないはずである。もちろんそれは松田や遠山にとって「意図せざる結果」であったに違いない。しかしこの二人の仕事のなかに人々の功利的な関心に応える部分があったからこそ、それらが大きな社会的影響力を獲得していったという事実は否定し難いのである。

3. 「専業子ども」の両義性

(1) 小さな消費者—「現代っ子」の肖像

高度経済成長期に出現した「専業子ども」は、極めて両義的な存在であったといえる。一方で「専業子ども」はその名のごとく親に庇護され、教育を受けるだけの「純粋な子ども」であった。しかし彼らはすでにみたとおり、消費者として自立していたのである。宗教的な規制の働きにくいこの国のなかでは、子どもを市場化することに大人たちが躊躇を感じるころが少なかったからこそ、マンガやお菓子の巨大な子ども向け市場がこの時代に生まれていった。しかしそれと同時に彼らは、幾重にも「小さな大人」としての側面を備えていたのである。

ニール・ポストマンは、活字文化の浸透が、子

ども期の出現を要請したと述べている。口承が文化伝達の主要な手段であったヨーロッパ中世においては、子どもたちは「小さな大人」であった。文化情報が主として活字によって伝達されている時代においては、リテラシー（識字能力）は社会生活を営む上で不可欠の資質となる。そのため子どもたちは、学校に通い読み書きを覚えることが必要になる。読み書きの習得の必要から、大人の世界と切り離された子ども期が要請されるようになった。多くの本を読み、知識の蓄積を行った大人と子どもの優劣は明白なものであった。

ポストマンは、テレビをはじめとするエレクトリックメディアの出現が、子ども期を消失させたという。本を読むのと違って、テレビを観るためには何の素養も必要とはされない。テレビの前には何の素養も必要とはされない。テレビの前には座る時、大人も子どもも対等である。そしてテレビは、性や暴力や金銭等々、これまでは包み隠されていた大人の世界の醜悪な現実を、子どもの前にもすべてさらけ出してしまう。テレビの発達には子ども期を消失させ、彼らをヨーロッパ中世と同じ「小さな子ども」に変えてしまった。テレビは、文明の全体をヨーロッパ中世と同じ文盲の時代に押し戻す力をもつとポストマンはいう(Postman 1982)。

60年代に入って急速に普及していったテレビが、子どもたちの世界に大きな変化を及ぼしたことは疑いようのない事実である。ポストマンのいうように、テレビの前では大人も子どもも対等である。大人が見聞きするのと同じ内容のものを、子どもたちも享受するようになる。情報摂取という面でも「専業子ども」は、「小さな大人」だったのである。テレビの浸透は、子どもに対する情報のコントロールという意味での親のしつけを不可能にするものであった。そしてテレビの番組やコマーシャルをみることで、子どもたちは市場と消費と都市の方へと導かれていったのである。

高度経済成長期には、「現代っ子」ということばが流行った。クールで計算高く、大人びた物言いをする子どものイメージである。ジンメルは「大都市の精神生活」のなかで、都市の生活は、頭の回転が早く、打算的で物事に飽きやすい性質

をもった人間を多数生み出すと述べている。「現代っ子」は、ジンメルが指摘する都会人の性格を多くもちあわせている。都市化が急速に進んで子どものイメージが、それまでの農村の子どもから都会の子どもに移行していった。そして、テレビを通しての情報の過剰摂取は、前述の子どもたちの傾向を一層増幅させ、都市ではない地域の子どもたちにもそうした傾向を身につけさせていったのではなかったか。「現代っ子」とは、テレビの時代が生み出した「小さな大人」の謂いなのである。

(2) 子どもの問題は都市問題である

話が私事に及んで恐縮だが、論者は鳥取県鳥取市の出身である。わが故郷にドイツから若者がやってきた。彼はまだ20代。ドイツの大学で日本文学を専攻した後、国際交流の仕事でこの街に滞在することになった。子どもの頃に彼は、日本製のテレビゲームでよく遊んでいたという。こんな素晴らしいものが作れるのはどんな国なのだろうか。それがきっかけで彼は日本という国に興味をもつようになった。彼が、鳥取市についてこんな感想を述べていた。ドイツの町は夜になるとまっくらになる。ところが鳥取市は夜でも賑やかで明るい。とても華やかな街だと思ふ、と。

ドイツの都市には、ゲマインデとしての、すなわち共同体的自治の伝統がある。都市には共同体的規制が様々に存在し、そのことが都市の市場化—企業が都市を舞台として利潤追求の活動を行うこと—に対する強力な抵抗力として作用してきたことは否定できない。共同体的な規制はキリスト教的な規制とも結びついている。かの青年の母国、ドイツのように安息日の遵守が求められる国であれば、日本のような24時間、365日無休営業のコンビニエンスストアなど考えることもできないであろう。ドイツの夜が暗く、静かなのもこうした共同体的規制の力によるところが大きいのではない。

ドイツに限らずヨーロッパの諸都市では、歴史的な街並みがよく保たれている。経済的な利益の追求を至上の目的に据えるのではなく、住むに値

する都市を守り抜こうという伝統がヨーロッパの諸都市にはある。過剰開発による俗悪化を免れ、都市のもつ長い歴史と伝統が実感されること。カフェやパール、さらには広場のような、異質な他者が交わるための空間が豊富に用意されていること。これらのことが、ヨーロッパの諸都市につきせぬ魅力を添えている³⁾。

他方、日本の都市においてはどうか。近世初期の堺や博多を例外として、日本には市民の自治の伝統がなかった。とりわけ第二次世界大戦後の高度経済成長期において、人々が農村から都市へと大量に流入を果たした結果、都市とは人間の大量が雑居する空間の別名と化してしまったのである。高度経済成長の過程を通して、大資本による巨大開発は無規制に進められた。その結果、東京をはじめとする日本の諸都市は醜悪な変貌を重ねていったのである。都市の共同体的な規制が根強く残っていれば、古い街並みを壊して大きなビルを建てることなど不可能事であっただろう。また、巨大な国土をもつアメリカを模倣して、狭い国土をクルマが覆い尽くすモータリゼーションを実現することもまた不可能事であつたに違いない。巨大開発やモータリゼーションによって、日本の都市の景観や個性は無残に破壊されていった。高度成長期以降の日本の都市には、市民の自治が根づくどころではなかった。日本の都市は、資本の植民地と化していた。都市のなかで資本は、恣意のままに振舞うことができたのである。

子どもや教育の問題として語られているものの多くが、実は都市問題なのではないのだろうか。都市部の子どもの遊び空間の劣悪化が進行していった高度経済成長期に、テレビやマンガなどのメディアが非常な勢いで発達していった。その結果、自由に遊べる空間の乏しくなった「外」よりも、様々なものや情報にあふれた「内」の方が子どもたちにとっては楽しい空間になった。高度経済成長期以降の子どもたちは、「室内動物化」していったのである（小谷 1998 98頁）。子どもたちに欠けているのは、のびのびと遊べる空間だけではない。自由になる時間も、そして仲間たちまでもが失われていった。かつてのように、子ども

を自由に「野に放つ」ことができない。そのことが、ゲーム、アニメさらには習い事等々への需要を喚起して、子どもたちの一層の市場化を促進していった。子どもを取り巻く環境の劣悪化と子どもの市場化が、スパイラル的に進行していった側面のあることは否めないのである。

高度経済成長期に子どもたちが市場化されていったことは繰り返し述べたとおりである。マンガやお菓子、おもちゃばかりではなく、教育産業もこの時代の成長産業だったのである。もちろん教育産業の発展は、以下にみる受験過熱と深い関わりがある。そしてそれと同時に、当時の日本を覆っていた経済効率至上主義の影響を無視することはできないだろう。当時の日本は開発熱に沸いていた。開発熱とは、経済活動のために利用されることなく、「遊んでいる」ものの存在を許しがたいと思う心性を人々にもたらしていった。こうして都市の「遊んでいる」土地にはビルが建った。日本中の「遊んでいる」砂浜が埋め立てられてそこに工場が建ち、あるいはコンクリートの護岸で埋め尽くされていったのである。専業子どもは何の仕事もなく「遊んでいる」。開発熱にうかされていた大人たちは、それを許しがたく思ったのではないか。そこに子どもの「能力開発」を唱える教育産業がつけこんでいった（椎名2003）。かくして塾や習い事に通うことが、「専業子ども」たちの「仕事」となっていったのである。

（3）「教育ママ」

経済が右肩上がりの成長を続け、高い学歴を求められる仕事が増えていたこの時代には、「教育アスピレーション」が急騰していた。「受験戦争」が過熱していたのである。子どもたちは「受験戦士」と呼ばれていた。早くから成績序列をめぐる競争のなかに投げ込まれていたのである。受験とは「よい学校から」から「よい会社」に入るための手段に他ならない。受験とはいわば、前倒しの入社試験。「受験戦士」とは未来の「企業戦士」なのである。受験勉強は、未来の企業社会に奉仕するシャドウ・ワークとしての性格を強くもっている。専業子どもたちは、勉強が仕事であ

り、「消費」が報酬であるようなサラリーマン予備軍＝「小さな大人」であった。

この時代に「教育ママ」ということばが誕生した。子どもの成績に一喜一憂し、子どもの尻を叩く愚かな母親たちの存在が、受験戦争を激化させ、子どもたちの世界を歪める元凶であるかのように語られていたのである。たしかに戯画化されたとおりの愚かな母親も多数いたことであろう。しかし、彼女たちだけを責めることはできない。母親たちが、子どもの成績や受験に関心をもたざるをえない状況がこの時代には生まれていた。「教育ママ」たちにも、ある意味時代の被害者という側面がある。彼女たちこそが、受験戦争の元凶であるなどとはとんでもない論理の転倒である。

「教育ママ」を生み出したものは、高度経済成長がもたらした都市の核家族の空疎さである。家業と家名の継承という、かつての「イエ」の担っていた機能を失った都市近郊の核家族が、子どもを育て上げるプロジェクトと化していたことは、すでにみたとおりである。皮肉なことに家庭電化製品の普及によって、家事の負担がかつてより大きく軽減されていたこの時代に、多数の家事専従者が生まれていたのだ。その結果、女性たちのエネルギーの莫大な余剰が生じていった。その余剰エネルギーは子どもに向かう。それが「教育ママ」を生み出す土壌であった。

「企業戦士」と化した男たちは、家にいないことが多い。勢い子育ては、母親の仕事になる。母親一人に子育ての責任がかぶせられていったのである。子どもの将来を考えた時に、もはや家業も家産もないのだから、男の子であればサラリーマンに、女の子であればその妻となる他はない。子どもに「よい学校」から「よい会社」へという人生を歩ませることが、わが子のためである。母親たちがそう考えるのは、むしろ理の当然というべきであろう。「教育ママ」たちは、愚かな虚栄心の故に子どもたちを受験戦争に駆り立てていったのではなかった。彼女たちはむしろ、子どもに対して、過剰で強迫的なまでの責任感を持つ人たちだったのである。

「教育ママ」のイメージを作り出し、女性たち

を揶揄していたのは、マスコミであった。そのマスメディアじたいが、受験戦争においては、マッチポンプの役割を演じていたのである。毎日新聞は、かつて「教育の毎日」の異名をとっていた。同紙には「教育の森」という定評のある長期連載があった（村松喬 1965-7）。この連載は一貫して、子どもたちに過酷な競争を強いる受験体制と序列主義に厳しい批判を加えていたのである。しかし同社の出版物である「サンデー毎日」は、「東大合格者高校別一覧」を売り物にしていた。こうした矛盾は「毎日」だけのものではない。日本のマスメディアは、表面的には受験競争を批判するポーズをとりながらも、実際にはそれを煽り立てていたのである。そのマスメディアが、「教育ママ」を揶揄するというのは、何とも奇妙な構図である。

高度経済成長期の日本の学校では、遠山啓が嘆いたように、序列主義と競争原理とが深く根を張っていた。高校も序列化され、地方では普通科の進学校を頂点とする「普・工・商・農」なる封建時代を彷彿とさせる序列の呼称までもがあった。旧制中学以来の伝統をもつ名門高校が、地方では大きな威信を保っていたのである。こうした序列が存在し、しかもそれを強く子どもたちに意識させる風潮があれば、わが子が序列の下位に甘んじること、惨めな思いをさせることは耐え難いと考えるのが親心というものではないのか。序列主義的な日本の学校システムも、「教育ママ」の誕生にあたって大きな力をもったのである。

「教育ママ」たちは、女性を家庭に押し込める社会の潮流と、受験熱を煽りたてる風潮の犠牲者であったといえなくもない。マスメディアは彼女たちのふるまいを揶揄し、あまつさえ子どもの世界を歪める元凶のように言い募っていたのである。「教育ママの誕生」は、「女は愚かな者」というジェンダー・バイアスと深く関係している。そして、時代の犠牲者とも呼べなくはない彼女たちに、子どもの世界の歪みのすべてを押し付ける「教育ママ」なることばは、「犠牲者を非難する言説」に属するものである。「犠牲者を非難する言説」はこの時代以降、子ども・学校・家族をめぐる問

題のなかで、様々に姿を変えてあらわれてくる。

註

- 1) アリエスは、子どもについての新たな意識の覚醒が、ジェンナーの種痘の発見に一世紀先んじている事を強調している（Aries 1960 訳 44頁）。種痘の発見によってもたらされた人口革命という下部構造の変動から、子ども期への新たな意識が芽生えたのではない。「子どもの発見」という心性の変化が、かえって人口革命を導き出したのである。
- 2) 大正自由教育については、中野（1968）と新田（2006）が詳しい。
- 3) ヨーロッパ諸都市の特性については、土井淑平（土井1998）に教えられるところが大きかった。

参考文献

- Ariés, Ph. 1960 *L'enfant et la vie Familiale sous L'ancien Regime*, Plon = フィリップ・アリエス 杉山光信・杉山恵美子訳『＜子供＞の誕生』みすず書房
- 1980 *Un Hisotorien du Demanche*, editions du seu = 成瀬駒男訳 1985『日曜歴史家』みすず書房
- Coveney, P 1967 *The Image of Children :The Individual and Society: Study of the Theme in English Literature*, Penguin = 江河徹監訳 1979『子どものイメージ』紀伊国屋書店(C)
- Shorter, F 1975 *The Making of Modern Family* Basic Books = 田中俊弘他訳 1985『近代家族の誕生』昭和堂(S)
- 土井淑平 1998『都市論』三一書房
- 河原和枝 1998『子ども観の近代一赤い鳥と「童心」の時代』中公新書
- 小谷敏 1998『若者たちの変貌』世界思想社
- 小谷敏編 2003『子ども論を読む』世界思想社
- 松田道雄 1967『育児の百科』岩波書店
- 村松喬 1965-67『教育の森 1-7』毎日新聞社

- 無着成恭 1995 『山びこ学校』岩波文庫
- 中野光 1968 『大正自由教育の研究』黎明書房
- 新田義之 2006 『澤柳政太郎―随時随所楽シマザルナシ』ミネルヴァ書房
- 椎名健 2003 「大衆化した早期教育―井深大『幼稚園では遅すぎる』他」(小谷編 2003所収)
- 遠山啓 1976 『水源を求めて―自伝的エッセー』太郎次郎社
- ―― 1977 『競争原理を超えて―ひとりひとりを生かす教育』